懇親会は勤務医と登録医のコミュニケーションの場になる．

阪神大震災で医療団を組み派遣する

医真会八尾病院は１月17日の阪神大震災の際に医療班を組んで，東灘区の住吉小学校で医療活動を行っている．八尾市は地震の被害はほとんどなかったが，近隣の神戸の災害が思いのほか甚大だったため森院長は１月19日午後３時に院内職員に救済活動を行う旨を伝えた．それから３時間後の６時に医師３名，看護士３名，薬剤師１名，事務職２名の医療団を組んで神戸市役所に向かった．現地は混乱しており，指示のないまま待機し，翌20日朝に東灘区の避難所，住吉小学校に派遣依頼があった．医療団は「八尾隊」と呼称することにして被災地に向かった．避難所には1,500人の避難民がおり，保健室を急場の診療所として診療活動を行った．混乱の中で無医村状態が続いたためか，受傷から４日も経った６cmもの挫瘡を治療したりした．当日は70名ほどの患者を診療して，翌日は100名ほどの診療を行っている．その夜は東灘区の保健所で約10班の医療団と合同ミーティングを行い，当地の保健所スタッフから感謝され，継続を嘆願される．人員交代，医薬品補給のためいったん病院に戻り，翌日からは日帰り診療隊を組み，電気の回復した１月23日より24時間体制をとった．その際，登録医の医師たちにも声をかけ，多くの先生が医療活動に参加されたという．

小児科部長の提島英雄先生は八尾隊に参加したが，そのとき登録医の先生たちと協力して診療活動にあたったことは非常によい経験だったと話していた．医療人の先輩として学ぶものが多く，今後の病診連携にも，この経験は役立つに違いないということだった．

森院長も先頭に立って医療ボランティア活動を行ったが，その生々しい記録は森院長と露原正行八尾市議員との対談というかたちで本になった．『阪神大震災 いま何をなすべきか』（創森出版）がそれで，診療活動のドキュメント，また地域で緊急事態が生じた場合どう対処するべきか，など熱っぽく討論されている．そこに森院長の地域医療への姿勢がよく現われているように感じた．